

課題 〈親子〉

# 私のアンパンマン

登場人物

青田杏（17）高校生

稲森浩輔（49）刑事

葛原明（24）タクシ―運転手・情報屋

井出ゆき（28）刑事

○上里サービスエリア（早朝）

稲森浩輔（49）、缶ジュースを三本持ってタクシーの助手席をノックする。吐く息が白い。

タクシーは「自家用」表示。

○同・車内（早朝）

青田杏（17）、後部座席でスマートフォンをいじっている。

葛原明（24）、運転席に座っている。

稲森、車に乗り込んでくる。

葛原「すみません稲森さん」

稲森「いえ。葛原さんはコーヒーでしたね」

葛原「はい。ありがとうございます」

稲森、杏に残りの缶を見せる。

稲森「杏。どっちがいい？」

杏、スマートフォンをいじっている。

葛原「杏ちゃん。どっちがいい？ ってお父

さんが」

杏「どちらでもいいません」

稲森「そうか」

葛原、エンジンを掛ける。

葛原「あの。ここまで来といてなんなんですか。これオレ一緒でいいんですか？」

稲森「もちろんです。むしろ二人きりだと、とてもじゃないが間が持ちません」

葛原「あー。はい」

車、発進する。

葛原、苦笑。

杏「葛原さん。なにかおかしいですか？」

葛原「すごい洞察力。さすが親子。杏ちゃんも刑事になれるんじゃない？」

杏「冗談でもやめてください。家庭より仕事を取って離婚なんて人として最低なんで」

葛原「それは」

杏「なにか間違ってますか？」

車内にウインカーの音が響く。

葛原「ら、ラジオでも付けましようか」

葛原、カーラジオを付ける。

「アンパンマンのマーチ」が流れる。

稲森「杏は小さい頃この曲が好きでね」

葛原「へえ。でもまあ小さい頃はみんな」

稲森「大きくなったらお父さんかアンパンマンと結婚する。なんて言ったりして」

杏「そういう昔話やめてくれませんか。いらいらするんで」

沈黙の車内に「アンパンマンのマーチ」が流れている。

○駐車場（早朝）

「ようこそ松原湖へ」の看板。

タクシー、入ってくる。

井出ゆき（28）、タクシーに手を振る。

ゆき「稲森警部補！」

杏と稲森と葛原、車から降りてくる。

杏「さむっ。しぬっ」

稲森、上着を脱いで杏に渡そうとする。

杏、葛原に駆け寄る。

杏「葛原さん。上着貸してください」

ゆき、杏に敬礼。

ゆき「あの。ワタクシは長野県警生活安全部  
地域課。井出ゆき巡査であります！」

稲森「辞めましょう。お互い非番ですから」

ゆき「あ。はい。すみません」

葛原「お久しぶりです。ゆきさん」

ゆき「あ。情報屋の、え。と」

葛原「葛原です」

ゆき「ああ。その節はどうも。こちらが稲森

警部補のお嬢さん」

杏「青田。杏です」

ゆき「え。あおた？」

葛原、ゆきの腕を取って離れる。

葛原「稲森さんは離婚してて今日は月一回の  
面会の日。ちなみに親子関係は最悪」

葛原とゆき、稲森と杏を振り返る。

○松原湖（朝）

湖面は凍結している。

杏とゆき、湖面に空いた穴に釣り糸を  
垂らしている。

稲森と葛原、離れたところで同じように釣りをしている。

ゆき「これはへ穴釣り〜っていう釣り方で松原湖の冬の風物詩なんです。ポイントは穴を開ける場所」

杏、釣り糸を眺めている。

ゆき「どこに穴を開けるかで釣果。釣れる量が全然違ってくるんです。そこにセンスや経験、実力が現れるわけです」

杏、釣り糸を眺めている。

ゆき「稲森警部補は私の理想の刑事です。事件のどこに穴を開ければ釣果が得られるか熟知してますから」

杏、釣り糸を眺めている。

ゆき「そして事実を明らかにすることの意義と責任、その重さを私は稲森警部補から教わりました」

杏「あの人が刑事としてどれだけ優秀でも私にとって最低の父親であることには変わりありません」

ゆき「へあの人〜って」

杏「あと、ゆきさん」

ゆき「はい」

杏「エサ。とっくに食べられてますよ」

ゆき「え？」

ゆき、釣竿を上げる。

針だけになった釣り糸。

× × ×

稲森と葛原、釣り糸を垂れている。

葛原「小山田。外交大臣になりましたね」

稲森「情報屋というのは、そんなことまで知  
っているものですか」

葛原「雇い主の弱みも握っておかないと不安  
なんで。それに好奇心もあって」

稲森「好奇心？」

葛原「若くして本庁の捜査一課に抜擢された  
敏腕刑事が、なぜ今は府中署の、しかもヒ  
ラの刑事なのか」

稲森「敏腕刑事とは。光栄です」

葛原「杏ちゃん。知らないみたいですね」

稲森「ええ。知らなくていいことですからね」

葛原「知らなくていい。そんなことあります？」

稲森「え」

葛原「ありますかね。そんなこと」

稲森と葛原、目を見合わせる。

葛原「お！ 来た！ ゆきさん！ ヘルプ！」

遙、葛原に駆け寄る。

ゆき「助太刀します。まずは深呼吸」

葛原「パス！ あと頼んだ！」

葛原、竿をゆきに預け杏の方へ向かう。

ゆき「え？ 葛原さん？ え？ あ」

ゆき、竿を受け取り、右往左往。

稲森、ゆきに手を貸す。

× × ×

杏、釣り糸を眺めている。

葛原、杏に歩み寄る。

葛原「どうですか？ アンパンマン夫人」

葛原、杏の向かいに座る。

葛原「むかしむかしあるところに正義感に燃

える新聞記者がおったそうな」

杏「はい？」

葛原「彼は大物政治家の汚職。さらには反社会的組織との癒着までも掴んだけれど逆に襲われ大けがを負った」

杏「なんの話ですか？」

葛原「その事件を担当した警視庁捜査一課の敏腕刑事は事件を穩便に済ませようとした上層部の怒りを買って左遷」

杏「え。それって」

葛原「それでも事件を追い続けたその刑事は核心に近付いたが今度はその政治家と反社会的組織から睨まれた」

風が吹き抜けていく。

葛原「家族に危険が及ぶと思ったその刑事は離婚。奥さんと娘さんを遠ざけた。なによりも大切な二人を守るために」

木の枝から雪が落ちる。

葛原「その刑事は集めた証拠を新聞記者に渡し事件は公になった。その政治家は記者会見で頭を下げたよ」

杏「捕まったんだ」

葛原「へすべて秘書のやったこととはいえ私の不徳の致すところですよ。その秘書は会見の最中にホテルで首を吊った」

杏「さいてい。最低じゃんそいつ。そいつのせいで」

葛原「せいで？」

杏「いえ。なんでもありません」

葛原「アンパンマンについて原作者のやなせたかしはこう言っている」

杏「はい？」

葛原「へほんとうの正義というものは、けつしてかっこうのいいものではないし、そしてそのためにかならず自分も深く傷つくものです」

杏「ほんとうの正義」

葛原「あるかどうかも怪しいもんだけどね」

葛原、杏に微笑む。

葛原「さ。温かいもんでも食べに行きますか。

杏ちゃん二人呼んできて。車回すから」

杏「ああ。はい」

杏、稲森とゆきの方に向かう。

× × ×

稲森とゆき、釣り糸を垂れている。

杏、歩み寄ってくる。

杏「ゆきさん。葛原さんが温かいもの奢って

くれるって。行きましょ」

ゆき「奢りですか。いいですね。体もすっか

り冷えましたし」

杏「ほら。お父さんも」

稲森「ああ。え」

杏とゆき、歩き出す。

稲森、動かない。

ゆき「あれ？ 稲森警部補は？」

杏、振り返ろうとするゆきを引っ張る。

杏「ほっときましょ。あの中年アンパンマン。

顔が濡れて力が出ないみたいなんで」

ゆき「ん？ アンパンマン？」

杏、「アンパンマンのマーチ」を口ずさ

みながら歩いていく。